

市長

新春対談

樋口恵子氏と語る自治体の在り方

市長 明けましておめでとつございます。今回はお忙しいところお越しいただき、ありがとうございます。樋口先生のご活躍は常々テレビや新聞などで拝見しており、市民や自治体の代弁をしていただくなど、とてもありがたいと思っています。

樋口 私は東京家政大学に勤めておりますので、言わば「コミュニケーション」の一員で、狭山市には大変お世話になっております。先日は市民の皆さんに向けた公開講座で小林カツ代先生をお迎えしました。市でも広報していただき、大勢のかたに来ていただきました。ありがとうございます。

市長 市民もそうだった公開講座などを大変喜んでいただいていると思います。さて、今回は少子高齢化の問題や介護・女性の社会進出などについて、先生のアドバイスをいただきたいと考えています。

現代社会のキーワード 「対等なパートナーシップ」

樋口 今、日本の1年先の株価、円相場、景気…すべて予測が難しいで

すね、しかし人口予測だけは比較的当たっています。1970年に高齢化率が7%を超えたとき、その後25年で2倍になると人口学は予測していました。そして実際に24年後、全国的な高齢化率は14%を超えました。自治体も国も、行政の基本はすべて「人」ですから、人口が今後どうなっていくかということを考えながら、国家百年の計とはいかなくても、10年〜20年先の計画をしていただきたいと思います。

市長 今まで、日本がこれほど急速に高齢化するとは考えられていませんでした。しかし、現在は世界で例のないほど急激な高齢化社会になるという、明確な数字が出ています。この発表が景気が良くて財源があるから何でもできた過去の時代ではなく、今日の「厳しい財政下においてあった」ということは、最低限のことを国と国民が役割分担し、協力し合って乗り越えていかなければならないと考えるのが、

樋口 チャンスですね。21世紀は今までの文句を言わない代わりに安くして」といつ時代から、お金も

出すけど口も出す」という参画型になっていきます。地方分権はその一つで、地方主導になり、役割は違いますが、国と地方が対等になりつつあります。私は今の社会の目標を一つのキーワードで括るなら、「対等なパートナーシップ」という言葉がぴったりだと思えます。地方分権では国と地方が男女平等では男と女が、そして官と民とのパートナーシップです。NPOも然り。すべてに「対等なパートナーシップ」が望まれます。

市長 そのとおりですね。これからは、自治体、地方から国に発信する、ということが基本になるような気がします。そういう面で自治体も、積極的にやるべきだと思いますよ。

樋口 地方分権についてはだんだんと認識が広がってきましたし、地方自治体の職員の皆さんの意識もずいぶん変わってきましたね。

介護保険、潮が満ちてくるように 浸透してきました

樋口 私が言うのは少し身びいきかもしれませんが、介護保険とは財



源付きの地方分権みたいなものだと思います。地方自治体の一部は最初、反対していましたが、住民の中にニーズがあるということは分かっていたんですね。施行1年後には変化が見え始めました。ある時期から、やる気のある首長がたくさん出てきたんです。何はともあれ、やらなければならぬ。と言いつつ、自治体のエースを投入してきました。こうしてカリスマ職員、カリスマ首長というかたがたが出てきた。こういう職員、皆さんは、行政そのものが福祉だ。と考えていらつしやるようなんです。要するに、自治体の仕事の中に福祉があるのではなく、広い意味での福祉こそ、地方自治体の仕事だということの方です。こうなってきたら、地方自治体が生き生きしてきたように見えます。



国と地方、男と女、官と民・NPO。今の時代、すべてにおいて望まれるのは、「対等なパートナーシップ」です。

市長 本音を言いますと、介護保険導入という話が出たときに、これは地方いじめではないかという感があつたんです。しかし保険者のことを考えて行政はやらなければならぬ。介護保険制度には、市民と保険を通じた契約関係があります。本来、行政のあり方而言えば、税金をいかに有効利用するかということなのですが、介護保険によって市民との契約関係ができあがったことで、真の市民サービスとは何か。」という原点に戻った気がしました。高齢者や障害者のために、国が思い切った施策を法律化し、それを自治体が行う

ことで、住民と行政との間に福祉の太いパイプができたと思うのです。そういう面でも素晴らしい制度だと思えます。

樋口 実行まで、大変だったんですけれどね。やってみたら、本当にすごいことができたなあ。」と思えます。何だか潮が満ちてくるみたいに動いていきました。それから、介護保険導入で変わったことと言えば、住民側から見ると、市役所が変わった。」と言つたんですね。5年前に比べたら格段に親切になり、きちんと聴いてくれるようになったって。

市長 それはお互いに人間と人間ですから。

樋口 5年前は、役所側も聴いてもどうすることもできない面がありましたから、たらい回しと言われた時代もありました。

市長 そうかも知れないですね。

樋口 今はとても親切に聴いてくれて、何らかの対策を取ってくれます。それから、制度利用に対する意識の変化ということでは、これまでの「お世話になる、措置される」という形から、住民が介護保険の利用者消費者になりました。だから苦情が増えるのは当たり前です。こういうふうには、介護保険が導入されたことによって、自治体行政が一味変わった

んじゃないかと思えます。

「**狭山ささえあい福祉公社**
全国に注目される事業」

市長 狭山では介護保険の導入に合わせて、**（財）狭山ささえあい福祉公社**というのを立ち上げました。介護保険に漏れた人もケアできるシステムです。これは、従来の無償形式だとどうしても受ける側に引け目があるから、多くの市民団体に協力していただきながら、有償ボランティアでやっています。時間預託制も取り入れており、全国に注目されている組織です。

樋口 そうですか。今第三セクターがあちこちで問題になっていて、今作られるというところは、そういう問題点を乗り越えていこうとしゃるといふことなのですね。

市長 そうです。しかも行政はこの福祉公社に基金を出しただけで、実際に運営していくためのアイデアなどは全て市民の皆さんが出し合っ作りました。とても良い運営ができています。

樋口 それでは今度ぜひ、活動の実態を見せていただきたいと思います。
市長 ありがとうございます。



樋口恵子(ひぐちけいこ)氏
1932年、東京生まれ。1956年、東京大学文学部美学美術史学科卒。同大新聞研究所本科修了。時事通信社、学習研究社、キヤノン勤務を経て、女性、福祉、教育の分野で幅広く活躍する。働く女性の立場から鋭く問題を指摘。地方分権推進委員など幅広い活動で知られる。「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」などの名文句をひろげた。
東京家政大学教授 人間文化研究所長。専門分野は女性学・高齢社会論・家族関係学）厚生労働省社会保障審議会介護給付費分科会委員 内閣府男女共同参画会議仕事と子育て両立支援に関する専門調査会会長 「高齢社会をよくする女性の会」代表 「女性と仕事の未来館」館長 著書：「私のまちの介護保険」盛年 老いてますます... 「午後咲く花 すてきに不敵に」樋口恵子の元気が出る老い方」ほか

「**シニア・コミュニティ・カレッジ**
本を抱えて街を闊歩する」

市長 それともう一つ、狭山市では高齢者に元気で社会参加してもらうために、**狭山シニア・コミュニティ・カレッジ**を創りました。パソコン、ハングル、生きがい、歴史などの学科に、いずれも定員を大幅に上回る申し込みがあり、今後は家政大学の先生にも講師をお願いしたいものです。



高齢者が元気で、それを見た若い人が「ああいうふうな歳をとりたい。「ああいうふうな生きたい。」と思えるような社会を作りたいのです。

樋口 私どもの大学には人材が揃っていますので、ぜひ活用していただきたいですね。

市長 1年間学んで卒業するときには、私が卒業証書を手渡しして、今度は学んだことを生かして市内の小・中学校で教師の補助ができるように、話が進んでいます。私は、アメリカの学生が本をたくさん抱えて街を闊歩しているように、高齢者の皆さんにもなつてほしいと思います。そして、そういう高齢者の姿を見た子どもたちにも、人生の大先輩を尊敬する気持ちを持ってもらえたら、21世紀の日本の社会も決して捨てたもんじゃな

樋口 市長さん、私はこれからの高齢者問題の最大の難関は都市の男性の高齢化だと思つんです。狭山も人口の半分以上は流入人口のサラリ

ーマンでしょう。このかたがたは、今は働いているから良いけれど、退職後は都市で老いていく。昔のように仕事を辞めたサラリーマンが故郷に帰らないですからね。男性の80%程度は、事業所を主たる活動の場にしていて、一定の技術を持っているという元サラリーマン。この人たちが地域に戻ってきたとき、どう受け入れますか。

市長 住んでいる地域の中でできることのメニューをたくさん作つて、プライドを保ち、経験を生かしながら活躍してもらおうと思つています。そういうことが医療費削減の面など、色々な面でプラスになると思つています。それがこれからの自治体の役割にもなつてきます。

樋口 このシニア・コミュニティ・カレッジも、新たな学習の機会だと思つていますし、そうしたものを發揮できる場が色々あつてほしいです。市長さん、私が関わつた男女共同参画の子育ての支援の中に、放課後児童の受け入れ促進策があります。私はそこで、一つの雇用対策ができると思つています。保育所の保育を退職サラリーマンに、といつてもいささか無理があります。学童保育室ならば男性が補助職員になれるのではないのでしょうか。定年退職後子どもたち



写真はイメージ

「志」とは、男は男の志を、女は女の志を持っていられることが大切です。誰かの志を誰かのための犠牲にはいけないのです。

の父親よりもちよつと歳が上の男性にお願ひして、パソコンなどを教えてもらえれば、小学生にとつても良いんじゃないかと思つています。

市長 それは良いですね、ぜひ実行したいです。

樋口 最近出演したテレビ番組で知つたのですが、杉並区に中学校の余裕教室で男性向きのデイサービスをしているNPOがあるんです。今の幼児性・女性性が強いデイサービスは、男性にはなじみにくい面があります。そこでは新しいデイサービスに、囲碁とか将棋、麻雀などをプログラムに取り入れ、大好評なんだそうです。これからは、高齢者「演歌・童謡」という固定概念から離れ、ピートルズのノリで老いていく高齢者が増えていくと思つています。

市長 そのとおりですね。

樋口 それから、私は最近、アメリカのジャーナリストの本を翻訳し、長寿社会の生き方について考えさせられました。人生80年と言いますが、今や人生百年の計を立てる時です。百年の計を立てておけば、志を**継**続けたまま死ぬことができる。昔は「志を果たすことが目標だったのが、今の長寿社会では、志を保ち続け、いつの日か世を去らん」。そんな社会を作つていただきたいと思つています。そして一言付け加えさせていざと、その志とは男は男の、女は女の志を持っていられることが大切です。誰かの志を誰かのための犠牲にはいけないし、夫婦であれば、夫は夫の、妻は妻の志をお互い果たせるように認め合い、一番協力し合えるのが本当の夫婦だと思つています。

女性管理職の登用

「慣れ」と「説得」が重要

市長 素晴らしいお考えですね。まさにそのとおりだと思つています。男女平等については、昨年、男女共生プランを改訂し、時代に合ったものが出来上がりました。しかし、実際の社会はまだまだ男性中心で動いているので、なかなか難しいです。世の中のそういう意識は徐々に欧米化してき

ているけれど、ペースが遅い。介護や育児から女性を解放することなど、これからの行政の大きなテーマです。

樋口 市長さんをお願いしたいことがあります。ぜひ市の管理職に女性を登用し、方針決定に女性を参画させてください。

市長 しかし、そこで問題があるのですが、女性の数を増やし、ポストも上げたいと思っても、女性側からの拒否反応が出るんです。その調整をどうすればいいのか、あまり極端に言つと辞めると言つと人が出てきます。それは遠慮ではなく、責任を持ち切れないから。とか、今の収入で良い。というところ、それにやはり周りの抵抗があるんじゃないかな。

樋口 政府などで責任ある立場で活躍している女性を思つと、何でそんなことが気になるんですか。「つていう感じ」です。確かに国は職階制だから女性もやりやすいし、実際女性官僚は結構大勢います。反面地域の伝統に根ざしている自治体では難しい部分もあるんじゃないかな。しかしこれはだんだん変わるものですよ。一つ例をあげると、小学校の女性教頭と校長先生がかなり増えてきました。これは文部科学省がリーダーシップを持って辛抱強く進めていくうちにできた面があります。「慣れ」

と「説得」ですよ。女性もやる気がないと生涯勤めにくくなる。いずれ公務員の給与体系も変わると思いますが、主査職までしか目指さない人はそれなりの給料になるのか。

市長 なるほど、慣れと説得ですか。

樋口 それから、小さい子を連れている人、妊娠中の女性に優しい地域社会になってほしいですね。以前ロサンゼルスタイムスの女性支局長と話したとき、ロンドン赴任中は妊娠中に地下鉄に乗ると男性が進んで席を譲ってくれたが、日本で譲ってくれたのは、出産経験がありそうな女性ばかりでした。と言っていました。その人は日本びいきなので、日本の男性がシャイだからというよりは、良く分かっています。日本、日本の妊産婦に対する冷たさは少し異常では



今の長寿社会、個人個人の目標は「志を保ち続け、いつの日か世を去らん」ということ。そんな社会を作っていたらいいと思います。

ないかと思つた。

市長 照れてしまつのかもせしれませんね。

高齢者子どもが目標にし、尊敬できるような存在に

市長 さて、市民が市に愛着を持ち、快適に暮らしていただける狭山市を作っていくことが私の願いなので、そのために着々と進めているのが、高齢者と教育に関する事業です。子どもたちが心豊かに育ち、高齢者を大切にしてくれる人になるような社会をどうすれば作れるかが最大の目標です。これができなければ、今後の日本は駄目になると思つています。また、これからの百年のスパンでの高齢社会をどうやって乗り越えていけるか。子どもたちが高齢者を見たら手を差し伸べてくれるような社会が必要だと思つています。高齢者が元気でいて、それを見た若い人があいつふうに歳をとりたい。「ああいつぶつに生きたい。」と思えるような社会を作りたいのです。その中の一つとして、今、駅前再開発事業で、高齢者子どもとも一緒に預かれる施設を作る計画を立てています。これは来年度市計画決定する再開発のプランにきちんと入っています。

樋口 それは新機軸ですね。子どもと高齢者を一緒に、というのが素晴らしいです。この事業はぜひ全国に発信していただきたいです。

市長 高齢者子どもも室内で自由に遊べます。それと同時に、お互いの交流もできるようにしたい。子どもが高齢者と触れ合う機会がないですからね。

樋口 今、家庭の中で子どもが接するのは40代末から50代という若い高齢者ですから、もつと歳が上の高齢者と触れ合うことは重要ですね。それにこれからは否応なく若い世代が夫婦で働くようになり、そこからどうしてもそういう施設が必要なんです。

市長 さらに、質の面でも両親が働いていても家庭に代わるような育て方ができる仕組みが必要です。

樋口 そのとおりです。今、男女共同参画にしても高齢化にしても、社会情勢は目まぐるしく変化しています。私はこの中を生きて、共に時代を創ることがとても楽しみです。今日は色々なお話をさせていただきました。ありがとうございます。

市長 こちらこそ大変興味深い、貴重なお話をいただき、ありがとうございます。今後ともご指導をお願いいたします。先生のますますのご活躍を期待しています。